保育の場における保育者の育ちあい
―遊び場面検討からの保育者の気づきと子どもの遊びを見る目の育ち―

平　野　仁　美
鈴　木　裕　子

Ⅰ　はじめに

保育所保育指針第13章「保育所における子育て支援及び職員の研修など」の項の中に、保育所に求められる質の高い保育を支える内容として、「職員の日常の自己学習や保育活動での経験及び研修を通じて深められる知識、技術並びに人間性が実践に反映されることにより確保できるものである。」と記されている。このことを受けて、全国の保育現場では、日々の忙しい保育の現状の中で、園内研修と称して多様な方法で研修や実践研究が行われている。

保育の現場は、「忙しい」「大変」である。しかし、保育者たちは保育をビジネスと考えてはいないし、時間から時間を連携し子どもたちの一日を、ただ淡々と引き受けているだけではない。子どもと過す時間をいかに「楽しく」「豊かに」しながら、子ども一人ひとりの発達のためのアプローチを心がけているのである。子どもたちの「表情」「動き」「言葉」を指標にしながら、「今日は楽しめたかな」「あの子のここが変わったな」「明日も元気で登園して来てくれるかな」「もっと保育を工夫してみたい」「どんな保育を展開しようかな」などと思い巡らす。この思いが園内研修の動機となっていくのである。

本研究は、2006年に行われた愛知県下の公立Ｆ保育園の園内研修を通した保育者たちの育ちの内容を検証したものである。

Ｆ保育園では、2005年から「遊びの実践研究」を行った。2005年度は、保育者たちが「遊び」をどう捉え、どう理解しているかの検証をもとに、自己の書いた保育指導計画月・週案の中から遊びを分類・分析・考察し今後の保育に生かせるものを抽出した。2006年度は、前年の学びを土台にし、個々の保育者が、子どもの遊びを理解し関わっていくために、保育場面から「遊び」を取り出し、話し合いの中から、そのときの子どもの気持ちや保育者としての関わり方を研修した。各保育者の提供した「遊び場面」「実践記録」は同じ園内で働く仲間への多くの学びのもととなった。

本研究は、このような保育者間の学びがどのような形で現場に反映され、子どもたちの保育に生かされていくのかを考察すると同時に、園内研修をした結果、保育者が「何に気づき」「何を今後の保育に生かせるのか」「話し合いの効果がどう表れたか」など、保育者の育っていくプロセスを整理したものである。

Ⅱ　研究方法

1．対象園について

⑴　園概要と職員構成について

（園児数）128人
（乳児０～２歳児数）34人
（幼児３～５歳児数）94人
（職員数）23人
（正規職員数）11人（産代・用務員も含む）
（非常勤職員数）５人
（パート職員数）７人（調理員１名を含む）

表１　保育時間　延長園・乳児・幼児保育

月～金	ＡＭ７：30～ＰＭ７：00
土	ＡＭ７：30～ＰＭ２：00

表２　園児数と保育者数（クラス担当人数）

年齢	園児数	保育者担当人数
０歳児	６人	２人
１歳児	10人	２人
２歳児	18人	３人
３歳児①	18人	１人
３歳児②	17人	１人
４歳児	30人	１人
５歳児	29（障２）人	２人
パート職員	―――	６人

※実践検討者はクラス担任を対象とする。
※園長・副園長はクラスを担当していない。

表３　保育者の年齢区分

20代の保育者	６人
30代の保育者	２人
40代の保育者	２人
50代の保育者	４人

※ 園長・副園長も含む

表４　グループの担当年齢の内容

グループ	20代	30代	40代	50代
0・1	３人			１人
2	２人		１人	
3	１人		１人	
4・5		２人		１人

※園長・副園長は50歳代。

⑵　園内研修におけるグループ編成について

表５　担当年齢区分

・１歳児グループ ・０歳児担当２人 ・１歳児担当２人 ・園長 ・副園長 ・計６人	・２歳児グループ ・２歳児担当３人 ・園長 ・副園長 ・計５人
・３歳児グループ ・３歳児担当２人 ・園長 ・副園長 ・計４人	・４・５歳児グループ ・４歳児担当１人 ・５歳児担当１人 ・障害児担当１人 ・園長 ・副園長 ・計５人

※上記４グループを編成

⑶　グループ編成の意図

・保育現場で保育者の働いている時間内は、常に子どもたちが生活や遊びを展開している。この時間の中で研修時間を取る工夫が保育者に求められる。
　Ｆ保育園では、有意義に研修を進められる方法として、小グループ編成での記録の読み合わせ・気づきの学びあいを中心に、話し合いの機会を持ち、研修を進めた。
・グループは４つに編成した。互いの保育実践の場面や実践記録がイメージしやすい仲間作りをすることが、すぐ保育に生かせる要素だと考え、乳児グループにおいては、同じフロアーで保育展開をしている仲間で編成をし、０・１歳児グループ、２歳児グループの２グループを作った。幼児グループでは３歳児は２クラス、４・５歳児はそれぞれ１クラスずつだと言うことで、３歳児グループ、４・５歳児グループの２グループを編成した。
・グループ研修を進めるとき、園長・副園長は必ず参加するこのことにより、他のグループとの潤滑油の役割と研修内容に対する助言者の役割を担った。

２. 園内研修の手順

⑴　遊びの場面とり

子どもの遊んでいるさまざまな場面から「遊び」の場面を採取し、一枚の紙に一場面の記入をする。場面についての保育者の思いを記入する。

⑵　遊び場面を以下の３つに分類する。
　①楽しそうに遊んでいると感じた場面
　②盛り上がらなかったと感じた場面
　③気になった遊びの場面

⑶　出された場面について、該当グループで話し合いを持ち、話し合われた内容を園全体に報告する。グループ報告にもとづいて、職員全体で話し合う。

Ⅲ. 園内研修の内容と考察

各グループでの事例をもとに、研修のテーマを設定し、検討された内容と考察を以下に紹介する。

１．乳児におけるふれあい遊びの意義

⑴　実践場面１

＜触れあい遊びの場面＞0.1歳児グループ
（場面提供者）０歳児担当Ａ保育者
①楽しそうに遊んでいると感じた場面
（年齢）０歳児（時期）６月中旬
・くすぐったり、ギュッとだきしめたりしながら、歌遊び、手遊びなどをすると、声をあげて笑い「あーあー」と何度も態度や、表情で要求してくる。
（場面への思い）
・保育者と一対一で、触れ合い遊びを楽しんでいるときの子どもの表情がとてもかわいく、自分

から保育者を探し求めてくることやもっとやって欲しいという要求が出せるようになった心の成長に保育者自身が喜びを感じ、この遊びが0歳児にとってとても大切だと感じたことからこの場面を紹介したかった。

⑵　グループの保育者の気づきと学び

1）1歳児担当C保育者

・0歳児は自分から遊ぶことが少ないので、大人が意識して触れ合っていくことはとても大切だと考える。触れ合うことで大人との信頼関係が深まり、その子なりに様々なことを覚えていくのだと思う。

2）1歳児担当D保育者

・スキンシップで安心・安定・もっとやっての心が育つので、0歳児は一対一で遊ぶのがとても大切だと考える。

・遊んでもらっている子を見て、楽しそうであった。他児が遊んでもらっているのを見て自分もやって欲しいなと思う要求がわくのだと感じた。

・やってもらいたいという要求がわくと寄ってくる。「自分もやって欲しい」の要求を自らだすようになるので、ここで、子どもの気持ちにしっかり気づいてあげることが大切だと思う。おいもほり・だいこんぬき等の遊びの子どもの様子から実感できた。

・大人との触れあい遊びを出発点にして、くっつき遊びが始まり、子ども同士の関わりができることを実感した。保育園は0.1歳児でも集団なので、やって欲しい子が集まってくると自然にこの状況が生まれる。

3）0歳児担当B保育者

・0歳児は、1歳児のように活発には動けないので触れあい遊びを通して体を動かしてあげることが大切だと考える。触れあい遊びを通して、手足を自然に動かすので、体づくりにもなり身体機能が高まることを実感した。

・触れあい遊びは、0歳児の遊びの基本であり大切だと考える。触れあい遊びをすることで、保育者との信頼関係の基礎ができるのだと気づけた。

4）援助者H

・0歳児は、自分で動かせる所を常に動かして生活している。一人でやっている時は、それなりに一人遊びを楽しんではいるのだが、より楽しいを味わうためには人との関わりが重要な要素を持つのだと考える。遊んでもらえる、遊ぶということを知るには、そばにいる大人からの「かまってあげる」触れ合い遊びから始めるとよいと考える。

・遊ぶ心（それをすると楽しい）との出会いには、実践提供者Aの、この場合の接し方は理にかなった方法で遊びと出合わせていることがよいと感じた。

⑶　グループでの学びのまとめ

触れあい遊びは乳児には、とても大切であり、以下の効果があると考える。

・子どもは、遊んでもらう楽しさ、遊びと出会う面白さ、触ってもらう心地よさを触れあい遊びから体感できると考える。そのとき、対応してくれる大人との関係ができ、そばにいて楽しませてくれる大人を信頼し始めるのである。触れられることにより、緊張したり、緩めたり、体の部位の筋肉弛緩・緩和により五感への刺激を著しく促すことができる。この遊びを通しての五感を発達させる効果は、子どもの姿を観察することで実感できた。

触れ合い遊びは、やってもらっている子はもちろん楽しいが、他児にとっては、その子と保育者の関わりを見て、「自分もやってもらいたい」の要求をわかせていることも確認できた。

⑷　園全体の学び

ここでは「触れ合い遊びが、心育てにつながる」過程が討議された。

大人との触れあい遊びを出発点にして、くっつき遊びが始まり、子ども同士の関わりができる。初めは一対一で遊ぶのが大切だが、自分以外の子が遊んでもらっている姿を見て、「楽しそうだ」と思い、「自分もやって欲しいな」という気持ちが起きる。やってもらいたくて寄ってくる。「自分もやって欲しい」の要求を自ら出す姿から、目からの刺激で楽しそうだと実感したことは、体験したい欲求を引き起こし、実現の為の行動を子どもの側から発信する行為につながるのだと考える。

安心して自己を発揮できるためには、自分が愛されていることを繰り返し実感することが必要で

ある。この実感は、触れ合い遊びとして体験することを通して顕著に現れると実践から確認できた。触れあい遊びの場面の状況や小グループでの話し合いの中から各保育者たちは、心育ての第一歩になることを十分確認できたようだった。今後は、触れあい遊びの内容の工夫を検討したいと考える。

⑶　園内研修における話し合いをもとにした保育者の育ちについての考察

この実践検討の学びを通して保育者たちは、触れ合い遊びは、“楽しさが味わえる遊び・乳児にとって大切な遊び”であることを確認している。この遊びが保育者と子どもの信頼関係を築く上で大切だと思える要素を話し合いからつかんでいる。

小グループの話し合いでは、最初は話し合い体験があまりなかった０歳児担当Ｂ保育者は、自分の意見をなかなかいうことができなかったが、他の保育者が話し合う姿から、自分の意見のまとめ方を学んだり、気楽に思いを言ったりする場であることの確認が自分なりにできたというエピソードもある。小グループでの効果は、各保育者が自分の気づきを語り易いグループ規模である。また、同じ部屋の中で一緒に保育していることにより、子ども一人ひとりに対しての共通理解があることで、場面提供者の場面への思いを十分に互いが理解し合えたことが、話し合いでの学びを具体化できたのだと考える。ここで自分の発揮の仕方を学べたことは保育者自身の大きな収穫であったと推察する。全体話し合いに持っていった時も、小グループの仲間が内容を十分理解できており、子どもの姿をしっかりと捉え、伝えることができているという点が、職員全体が効果的な学びを実現できたことへつながっていったのだと考える。

２．見立て遊びに見られる乳児の内面の育ち

⑴　実践場面２

＜電車ごっこの場面＞0.1歳児グループ
（場面提供者）１歳児担当Ｄ保育者
①楽しそうに遊んでいると感じた場面
（年齢）１歳児（時期）７月25日ＰＭ４：00
・Ｙ君は三つ編みのひもを首にかけていた
（保）「Ｙ君の電車にいーれ－てー」
（Ｙ）「いいよ」
二人で電車ごっこをしていると、次々に「いーれーてー」と他の子どもたちが入ってきた。５人列車になって、保育者と一緒に部屋の中で電車ごっこをして歩いた。他の保育者も「いっていらっしゃーい」と声をかけた。
しばらく電車ごっこをして、
（保）「おんせんにつきましたよー」
　　「みんなでおふろに入りましょう」
（保）「シャワーだよ」→（子）「あらって」
（保）「シャンプー」→（子）「あらって」
※友だち同士洗い合う
（子）「先生も洗ってあげるよ」
（子）「先生もはいりん」
（保）「ありがとう」ザブーン…！！
（保）「あーきもちよかった」
※ずっと傍観していたＭがひもを首にかけた
「Ｍちゃん電車やる？」
※うつむいてしまう。
　このときは入れなかったＭちゃんが、後になってから電車ごっこで遊んでいた場面を発見！！
（場面についての思い）
・１歳児がこんなに何人も集まって一緒に遊べると思っていなかったが、もめることもなく長い時間イメージを共有して遊べた場面を伝えたかった。
・たくさんの人数で遊べたこと
・遊びが長く続いたこと
・先生も仲間に入れ、みんなが交代で遊べたこと
・はにかみやのＭちゃんがみんなの遊びをずっと見ていて、後で同じ遊びを自らしていたこと
※保育者は１歳児がこんな形で電車ごっこができることも要求も想像もしていなかった。思わぬ場面に出会えたことを紹介しながら話し合いの題材にしたかった。

⑵　グループの保育者の気づきと学び

１）１歳児担当Ｃ保育者

・現１歳児は言葉がよく出ている子が多く、保育者の投げかけに対しイメージを共有して遊べる状況である。
・一人遊びだけでなく仲間と関わって遊べる子も多い。一つの遊びを私も私もと自分だけでなく、数人で楽しめる姿が見られる。しかし、まだまだ大人とも遊びたい。実践場面２は、保育者がうまく子どもの中に入って要求のつなぎができた事例だと思う。

・甘えるのがへたなＭちゃんは、遊びたいがうまく仲間に入れないことが多い。自分の思いを現すのが下手だし、ストレートに手が出せないという子である。この遊びは、Ｍちゃんが他児の楽しむ姿を取り込んで、時間を隔てて楽しめた遊びであり、その後のＭちゃんの育ちに響いていく遊びだったと考える。

2）０歳児担当Ｂ保育者

・「いれーて」の言葉からルールめいたものがでてきてそういうこともわかってきたのかな？と思う。

・場面が変わっても中断することなく、発展できるようになって来たことを発達だと考える。

・Ｍちゃんは大人に慣れない子だと感じている。遊びたいが入れない、やりたいが伝えられない、その気持ちはちょっとつらそうに感じた。しかし、時間はずれたが、遊べてよかったと思う。

・Ｍちゃんの姿を保育者みんなが気にかけていたのだと話し合っていて知ることができた。

3）０歳児担当Ａ保育者

・１歳児がごっこを楽しめる条件が揃ったというより、今年の子の質の高さは言葉の獲得・言語発達にあると思う。

・外言が豊かだという事実は、内言はさらに育っていると考えられる。

・イメージの育ちは、言葉の育ちについてまわるので、１歳児の子同士でもイメージの共有はあると考えられる。保育者と子どものイメージの共有はもっとできると思う。しかし、１歳児にわかる言葉や日常生活に密着した投げかけは保育者が日頃から心がけているので、電車で出かけた当たりは、仲良く紐の中に入っていられる配慮は気づかぬ間にあったのではないかと考える。

・風呂に入る場面では、温泉という言葉を使ったが、日常イメージである体洗いやシャンプーの場面を保育者がわかりやすい動作で伝えていたのだと考える。このことから、場面提供者Ｄが保育経験豊かであり、細かな配慮が自然にできている。

4）援助者Ｈ

・場面提供者はこの遊びの中に一緒に入っていた。言葉のやりとりの中から、保育者自身も楽しかったと推察できる。

・「こんなこと１歳児にできるんだ」という思いで遊びに加わっていたことがよい援助につながったのだと考える。

・一人遊びの時よく聞かれる、「ダメ」「私の」「イヤ」という言葉は電車ごっこのとき、出なかった。みんなでやりたいという気がとても感じられた。場面提供者の子どもたちへの関わりが暖かくとても楽しめる要素が投げかけられていたからだと思う。

・Ｍちゃんの入園当初は、どんなことにも引くのみで「さわらないで」だった。今は、「やりたいけどうまくかかわれない」というだけでなく、「自分はいつかやりたい」という気持ちが出てきたことが読み取れる。

・時間はずれても、思いを実行できたこと、自己アピールができたことは、Ｍちゃんにとってよかった。今後が楽しみである。

⑶　グループでの学びのまとめ

今年の１歳児は言語獲得がよくできている子が目立ち、日常から自分の思いを言葉で伝えることができる子が多い。そのため、保育者が話すことへの理解も良くでき、落ち着いて日常を暮らしている子が多いことを、はじめに確認しあった。

１歳児でも電車ごっこが楽しめたことは、日常の生活や遊びの体験から、育っていた一面が電車ごっこ遊びを通して表れたと考えられた。楽しさを味わわせるために、１歳児担当のＤ保育者の自然で計算のない働きかけが効をそうしたのではないかとも考察された。子どもと保育者のやり取りの楽しさが、Ｍちゃんの心にも「あの遊びは楽しい。やってみたい」と思う気持ちを出させたのだと思う。子どもが小さい時は保育者の言葉かけは多くてもいいと思う。言葉かけされることから、言葉を学び、自己の言葉世界を広げていけるのだと考えるからである。

見立て遊びを楽しめる子どもの育ちが、発見でき今後もこういう遊びを体験できるように話し合いを充実させていきたいと考えている。

⑷　園全体の学び

保育者が子どもを愛し、一人ひとりを大切に保育している事実が小グループの報告から伝わる。

声を掛けてもだんまりで表情も固く、笑顔はほとんど見られなかった。
・保育者とR男との楽しそうな対話的な遊びを隣で見ていて、H子の心に何かがストント落ちたのだと思う。
・実践場面3をきっかけにH子にS子が声かけしたり、関わったりし出した。S子以外の他の子もH子を意識する状況が生まれた。
・保育者は実践場面3の中で、R男との関わりを中心にしていたが、同じ場所で遊ぶことで、今まで保育者を拒絶していたH子の意外な展開に、保育者自身が戸惑いと喜びを感じた。

⑵　グループの保育者の気づきと学び

1）2歳児担当F保育者

・H子の姿を見て2歳児担任の保育者EとFは二人で喜びを分かち合うことができた。
・保育者Eの言葉かけのうまさは子どもの遊びを楽しませるのに大切だと思った。
・保育者の言葉かけにより、心・表情がこんなにも和らぐものだと思った。子どもの心をフワッとさせる言葉かけができる保育者Fはすごいと思う。

2）2歳児担当G保育者

・だんまりH子が遊びに入れるようになったのに感動している。
・H子にとってS子の存在は大きい。この場面をきっかけに、H子がS子と仲良くなり、毎日関わり仲良く遊びながら、H子の変化していったことに驚いた。
・保育者Fの子どもへの関わりで、遊びに参加しやすくなったH子の様子から、きっかけはほんの少しのタイミングであると感じた。
・遊びが広がっていく場面を見て保育者の姿勢は保育を進めるうえでとても大切だと感じた。

3）援助者N

・保育者の言葉に反応する子どもの姿を見て、保育者の言葉は遊びの中で大きな意味を持つことを改めて確認した。
・子どもが共感するとは、自分のイメージと合ったときであると感じた。熱いときに「フーフー」・・・生活感がある言葉は、どこかで自分の体験につながっていると思う。
・「お母さんのオッパイみたい」という言葉は、言えそうでいえない言葉である。このような言葉が心にせまる言葉かけとなっていると思う。
・保育者が「そーだね。一生懸命考えたね。」と汲み取ったり、共感したりすることが子どもの発達につながっていくと思った。
・保育者が楽しんで遊んでいると感じた。楽しいと思ってやっていないと子どもの楽しいにつながらないと思う。

4）援助者H

・実践場面3の中で保育者がR男に言った言葉「アッチッチあー熱い！フーフーフー」は、そばで見ていたH子の顔がゆるみ歯をみせてニコッと笑った。このときH子の心に響いた言葉だった。
いつか自分にもこの言葉を掛けてもらえるときが来ると待っていた。H子の思いに驚いた。2歳児にこんな力が備わっていたのかと感動した。遊びを楽しませる言葉の大切さをここで十分感じ取れた。
保育者や仲間と共感できる言葉がここにあり遊びを盛り上げたのだと感じた。
・子どもとの言葉のやり取りの中で、子どもの興味・関心をどうとらえ、どうかえすかということを保育者は忘れてはならないと思う。
・言葉が未発達ならば、子どもの思いをきっちり代弁してあげることで、子どもは保育者を信じ甘え「気持ちをわかって」「気持ちを伝えたい」と言わんばかりに、アイコンタクトを取ってくる。受け答えのタイミング、代弁の内容をずらさないことが遊びをより楽しいものにしていくのだと考える。

⑶　グループでの学びのまとめ

子どもの心に響く言葉は感性を育てるという考え方について検討された。

自分をわかってくれる保育者のそばで遊べることは楽しさを味わうために必要だと思う。日常的でイメージがわく言葉をシャワーのように掛けてあげながら対話的に遊ぶことで、共感し合えたり、繰り返し遊べたり、夢中になれたりするのである。その中から心・頭・感覚の発達を通して、仲間の存在を確認し、一人で遊ぶより楽しいと感じるのであろう。

言語表現の未熟な2歳児たちは、他児と保育者

との会話の中から自分的な楽しいを見つけ要求してくる。実践場面３でのＨ子がまさにそれであると話し合いの中からどの保育者も気づけた。

保育者が今日関わろうとしていたＲ男本人のみだけでなく、周りで遊んでいたＨ子に思わぬステップアップの種がまかれたことが集団の効果であり、遊びを通して育つ場面だった。保育者は、ややもするとこの好結果に気づけない。しかし、２歳児が複数担任であり、それを見届けていた保育者がいたことや互いに知らせ合える連携も取れていたことで、Ｈ子の楽しい体験とその後の気づきに共感できたことが、この話し合いの中から確認できた。

保育者は、子どもの内から、外から気持をわかってあげ、気持ちをそらさない言葉かけが適切にできることで、子どもの心の代弁者ともなりうるのだと確認しあった。

⑷　園全体の学び

ここでは、記録の読み取りを中心に討議が進行した。実践場面３は子どもとのやり取りがホンワカ伝わる記録の書き方がされている。子どもへの柔らかな言葉かけ・気持ちが楽しくなる言葉かけがされている場面記述があることからわかる。遊びに関わる保育者自身も楽しそうである。

保育者の言葉かけに子どもが思わず笑う、安心できる、落ち着ける、この先生と一緒に遊びたいと思えることが伝わる。子どもに関わる時、ある種の保育者のテンションの高さは保育場面を盛り上げるのには大事だと思う。

自分を見ていてくれる、意識していてくれる保育者の存在があると感じられると子どもは、自らの内面をさらけだしてくれるのではないかと確認できる。

気になる子の変化に気づけたとき、そのチャンスを逃さず関わっていくことが大事である。

また、保育者同士の連携は、複数担任で保育を進める乳児の保育者にとって重要な意味を持つ。子どもの姿の変化の喜びの共有は、このような状況の保育者同士の信頼関係を増し、その後の保育者間のよい関係をもたらす要素になると考える。

⑸　園内研修における話し合いをもとにした保育者の育ちについての考察

保育者Ｅの存在は、２歳児グループの核となっている。子どもを見る目の確かさと、子どもを大切にする姿勢は、若い保育者たちの手本となり、保育姿勢への影響は大きい。この中で、保育者Ｅの提供場面を検証し話し合うことの意味として、子どもとの関わりの場面や気になるＨ子への適切な援助が学べたことである。

保育者Ｇは新任で、最初は保育に対しての不安も大きかったため、表情も非常に硬かったが、仲間の保育者との関係性の中で、保育への安心感を持ち、自分なりの保育に対する自信も得られたことにより、表情が明るくなり保育を楽しめるようになったことを園全体の保育者が確認している。このグループに所属し日常を送りながら、場面の話し合いを体験できたことで、子どもへの関わりや援助を確実に学んでいる。気になる子への対応は、保育者Ｇにとって、直接援助場面（日常の保育での関わり方）と間接援助場面（話し合いの繰り返し）の中で疑問を解消しながら保育できるのである。ベテラン保育者Ｅと中堅保育者Ｆからの学びをもとに、複数担任であるメリットが非常に好結果をもたらして、保育者Ｇが育っているのである。園内研修の効果と認められる。

４．子ども同士の関わりに潜む「思いやり」

⑴　実践場面４

＜大きい子と一緒にかけっこの場面＞
３歳児グループ
（場面提供者）３歳児担当Ｉ保育者
①楽しそうに遊んでいると感じた場面
（年齢）３歳児（時期）５月２週
年中女児Ｓ「いれて」・・・・３歳児がかけっこをしているところに入ってくる。
保「いいよ」
「小さい子がじょうずに走れるかみてあげてね」
３歳児とＳがヨーイドンで一緒に走る。
途中３歳児Ｋが転んで靴が脱げる。
一緒に走っていたＳが気づいて、土をはらい靴をはかせてあげ、手をつないでＫとゴールまで走ってくれる
保「Ｓちゃん小さい子にやさしくしてくれてありがとう」
保「Ｋちゃんお姉ちゃんが一緒に走ってくれてよかったね」
Ｋ「うん」うれしそうにうなずく。

（場面についての思い）
・保育者が見ていてＳとＫの関わりが心温まった。
・Ｓの優しい行為にＫは泣かずに靴を履きなおし、ゴールに向かうことができたのだと思う。
・かけっこの場面に限らずこの頃、ＳがＫやＮをよく遊んでくれるようになっていた。
・①楽しそうに遊んでいると感じた場面として意識してとった場面である。

⑵　グループの保育者の気づきと学び

1）３歳児担当Ｊ保育者

・小さい子への思いやりをこの場面から読み取れた。優しくしてもらって嬉しい気持ちが、Ｋを頑張らせるエネルギーになったのだと感じた。

2）援助者Ｎ

・大人がかかわったらこんなにうまくいかなかっただろうと感じる。大人では出せない力が、子ども同士の関わりの中に大きく潜んでいたと感じる。

3）援助者Ｈ

・ＳとＫはこの日だけの関わりだけでなく、日常なんらかの関係ができていたから、Ｓは一緒にかけっこをしようと思ったし、Ｋが転んだのを気に掛け、走るのをやめてＫの所までもどっているのだと推察する。
・ＳはＫの靴を拾いＫの所にもって行きＫに履かせている。その間、ＳはＫの足の土を掃ったり、傷を察したり、手をつないでゴールまで行くという行為をしている。４歳児にはなかなか見られない優しい姿だと思う。
・Ｋは優しさを受け入れられる力もあり、Ｓの励ましに答え途中で走るのをやめずゴールまで行くことができた。３歳児のＫが大人に助けを求めなくても頑張れるのは、Ｓを信頼し支えてもらえるからだろう。ＳとＫの絆が日常で育っていたのだと考えられる。
・Ｓは４歳児桃組の中でなかなか遊べず、３歳児の世話をすることで、自己を認め満足させる材料を求めていたのだと推察する。朝、ＫやＮが登園して来るのを度々気にしながら待つ姿があった。自由遊び中の園庭でＳがＫやＮを遊んでいてあげる場面が時々見られた。Ｓは３歳児を遊んであげながら、自分の居場所を求めていたのかも知れない。しかしながら、Ｓの存在はＫにとっては世話をしてくれる優しいお姉ちゃんである。

⑶　グループでの学びのまとめ

ここでは、大人が行って関わっていたらどうなったかをテーマに討議が進んだ。

転んだ・痛い・もう走れない・甘えたい・こんな可愛そうな私を受け入れてなどのマイナス発想の連鎖につながり、実践場のような状況にはならなかったと予測する。保育者がどうしても前面に出やすいが、Ｓのタイミングのよさやそばにいた保育者の子どもへの見守り方が実践場面４の状況を生み出したのだと考える。

では、大人では引き出せない力とは何だろうか。相手が子どもなので全面的に甘えを丸投げできない気持ちが、自分の頑張りの力を引き出すのだと考える。子どもの心の育ちの未熟さが、時にはクール・割り切り・自己中心に大人から見ると感じられるが、自己の力を発揮するためには、この未熟さが、かえって子ども力を引き出すのではないかと考える。

子ども同士の関わりのなかに潜む大きなものとは何だろうか。気持ちが通じる、気が合う、一緒にいて楽しい、相手の話が聞ける、言葉は未熟でも通じ合えるなどの関わりから生じる様々な要素が子どもの内面を育てるのだと考える。

Ｓの様子はどう捉えたらよいだろうか。心地よさを味わいながら、クラスの中で楽しめない自己葛藤を続けているのではないかと察する。Ｓの優しさはとってつけたものでなく、Ｓが体験している、母親・祖母などからの愛情の現れであると感じる。そばにいる大人が、Ｓを認め・伝え・自分の良さに気づき自分に自信が持てるように仕向けていくことが今後大切であると考える。

⑷　園全体の学び

園全体の中で話し合ったとき、Ｓの担任である保育者もいたが、Ｓの状況に気づけていなかったことを確認した。担任はＳを十分に観察し、Ｓへの対応を心がけることにした。Ｓの思いやりの心に潜む、園での居場所についてもう一度考え直す機会ができたことは、話し合いの成果であると考える。

子どもは日常をどう過ごしているかで、身につく思いやりの育ちもちがうと考える。ここでは、思いやりを含めた子ども力と援助する側の保育力について話し合われた。そこで、討議されたテーマは、「子ども力」とは何かということであった。以下の①から⑫を「子ども力」として考えることにした。

①考える力、②遊びを創り上げる力、③失敗は成功の基と思い、遊びにむかえる力、④いろいろな子と大勢で遊ぶのが楽しいと思える力、⑤みたり、真似たり、考えたり、「やってみようかな」と思う力、⑥幅広く好奇心を持って、遊べる力、⑦みんなとも自分からも自由に遊び出せる力、⑧愛されている実感をもとに、生きる力を身につけて行く力、⑨安心して自分を出せる大人の下で、遊ぶ力・関わる力、優しい心が持てる力、⑩意欲の育つ力、⑪やってみようとする力、⑫人を信頼できる気持ちが育つ力

では、保育者の「保育力」とは何だろうか。①一人一人を大切にし、触れ合って分かり合う力、②言葉かけを学ぶ力、③楽しいと思えることをたくさん伝えてあげられる力、④遊びを自分が心から楽しいと思える力、⑤細かなひとつひとつの行動、言葉を受け止めてあげられる力、⑥心の底から楽しいと思える保育を提供していく力、⑦子どもの目線に立って援助する力、⑧マイナス面の理解を客観的に捉えられる力、⑨気になる子の気持ちを理解する力、⑩子どもを信じ理解する力、⑪親の思いを受け止め、話しを聞いてあげ理解する力、⑫子どもと一緒に遊びを楽しむ力、⑬いろいろな先生から学ぶ力、⑭謙虚になって見て学び取り込む力、⑮話し合いから学ぶ力。

この討議から、子ども力と、保育力を確認しあいその２つの力の相互作用を確認した。

⑸　園内研修における話し合いをもとにした保育者の育ちについての考察

当初、保育者Ｉは、実践場面４を「①楽そうに遊んでいると感じた場面」としてあげたが、話し合いの中で「③気になった遊びの場面」へと変えた。このことが、Ｓの内面を考えるきっかけとなり、話し合いの中身が深まった。Ｓの優しさが前面に出ているが、Ｓの内面を知ることの大切さに気づけたのである。また、子ども力をうまく引き出し、子どもの内面を育てる保育者の保育力の大切さにも気づけたことが、園全体の話し合いで子ども力や保育力について考えるきっかけをもたらした。Ｉ保育者は、小グループでの話し合いがなかったら、このことに気づけなかったと全体の場で発表している。

保育者Ｊについて考察すると、Ｊは保育経験５年目であるが、今までこのような場で、自分の意見を言うことも苦手であり、場面からの読み取りも甘く、きちんと自分の意見を言わずに過ぎてきた。また、保育者としての仕事の楽しさも味わってきていなかったということに気づけた。真剣に話し合い、そこから得られる充実感が、保育を楽しめる要素があるということを知り得たことはＪの喜びにつながったようだ。まさに研修の効果であった。

５．素材を生かす

⑴　実践場面５

＜ダンボール遊びの場面＞4.5歳児グループ
場面提供者）５歳児担当Ｌ保育者
①楽しそうに遊んでいると感じた場面
（年齢）５歳児（時期）５月下旬
・遊戯室で、大きなダンボール箱を使ってキャタピラー遊びをした。
・保育者は、それ以上の発展をあまり考えていなかった。しかし、２・３人でダンボールに入り『家ごっこ』が始まり、「先生屋根を作って」と発展。
それから『基地作り』に発展し、「前が見えるように穴を開けて」と言ってくる子もいた。遊び方が一つにとどまらず、いろいろ変化してとても楽しそうだった。
（場面についての思い）
・全体に誘ったわけではないが気がついたらクラス全員で楽しめていた。
・保育者はキャタピラー競走しか考えていなかったが、子どもたちは、ダンボールを立てて遊ぶ、家に見立てて遊ぶ、引越し遊びに発展していった。
Ｔ男「屋根が作りたい」「穴をあけて」（周りが見えないから）など、Ｔ男が考えた遊びがこどもたちに広がりたくさんの子が楽しめた。遊びが広がっていく面白さを発見した。

⑵　グループの保育者の気づきと学び

1）4歳児担当Ｋ保育者

・Ｔ男は緑組の中で常に魅力的な存在であり、アイディアが豊富なことがその要素であると考える。

・Ｔ男の遊ぶ姿が魅力的であることが実践場面５からわかるが、保育者ＬがＴ男の思いをさりげなく受けとめながら、保育が進められていることが、Ｔ男が遊びを楽しめた要素だと思う。

・保育者Ｌの自然な関わり方を学び、今後自分も桃組の子たちに対してＬ保育者のように関われる努力をしたい。

・他児への刺激となる子ども自身の姿は、素材を工夫して楽しんでいるのを感じ取れた子がいたことであると考える（他を意識する目、他から取り込もうとする気持ちがあった）。

・他児への目の向け方が５歳児らしい。４歳児の気づきとは違うところを発見した。

・この話し合いの中から、４歳児桃組担任として、子どもたちから一歩ひいている自分に気づけた。

2）５歳児援助者Ｍ保育者

・ダンボールは、子どもの遊びになりやすい素材である。この遊びは、ダンボールがたくさんあったことをきっかけに発展したのだと考える。

・キャタピラーで遊ぶことへの発展は、頭の固い保育者では柔軟に切り替えられないと思う。保育場面提供者Ｌは、Ｔ男の何気ない考えを拒否せず、取り込んだし、展開も子どもの声に耳を傾けながら進めたことが柔軟な対応でよかった。

・次々に子どもたちの中にアイディアがわいたことや保育者がいらない言葉をかけずに、子どもたちの遊びを見守れたことが、こどもから遊びを引き出せた要素だったと考える。子どもの中には、楽しい思い・盛り上げの要素がたくさん詰まっている。子どもからうまく引き出すのも保育力の一つの要素である。

3）援助者Ｎ

・子どもにとって遊べて嬉しかった、面白かったという気持ちがごっこ遊びを楽しく発展するためには大切な要素だと思う。

・満足感は遊びにとって大切な要素である。

・色々な角度から子どもは満足感を得るものである。

4）援助者Ｈ

・保育者Ｌは、Ｔ男に対して好感を持っている。

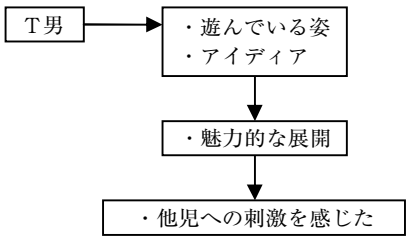

図１　　Ｋ保育者によるＴ男の捉え方

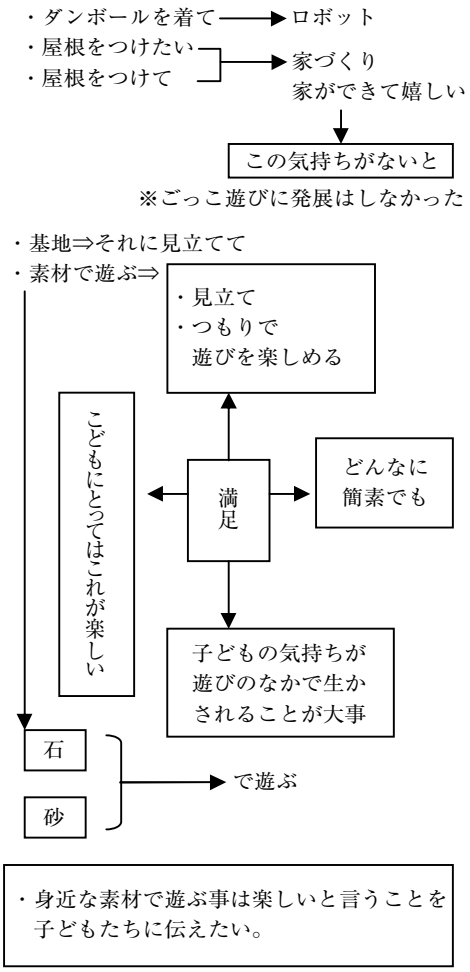

図２　援助者Ｎの気づきと学び

このことは、場面についての思いの中で感じ取れた。日頃からＴ男は、遊びを楽しむための工夫力があることを保育者Ｌは理解しており、この日もＴ男のアイディアに保育者が共感して、援助していると感じる。

・保育者Ｌに認められているＴ男をクラスの仲間も認めている。このことは、日頃の遊びの楽しい工夫をＴ男がし、他児は、一緒に遊ぶことを好んでいる。Ｔ男の遊びの工夫の提供や発信をクラス中が認めているのだと考える。

・素材を使って遊びを工夫し、自己のできないことを保育者に求め力を貸してもらいながら、遊びを楽しむ事を実現している。このＴ男のアイディアを保育者は面白いと思い、援助している。保育者自身が考えていなかった、遊びをＴ男が展開していく姿に保育者Ｌ自身が面白さを感じ援助しながらワクワクして見守っている。このことは、素材を生かして遊ぶ姿への興味であり、保育者から認められて有能感を感じながら、遊ぶＴ男の姿を発見することができる。

・素材を工夫して使って遊ぶＴ男の姿は保育者にも他の子たちにも刺激を与えていると考える。

⑶　グループでの学びのまとめ

このクラスは、やや扱いにくい集団といえる。男児は人数も少なく、幼い。女児は小グループで遊ぶ。苦手なことは避けて通る傾向の子が多い。好きな遊びなら遊べるが、気分のばらつきや育ちのでこぼこが目立ち、体験のないことに気持ちを向けるのが難しい子が多い。Ｔ男の存在はこの組の中でよい刺激を与えてくれている。

今回ダンボールという素材に出会え、工夫して遊ぶ楽しさを知った子が多く、遊びが発展していったのだと思う。個の工夫を取り込んで遊ぶ姿は、仲間と楽しいを共有できる要素だといえる。実践場面の記載の中に、遊びが一つにとどまらずという文があるが、マイナス要素としなかったのは、こどもが楽しそうに遊んでいたからだと思われる。

ダンボールの量もたくさんで、子どもが充分遊びこめる量であったことも、遊びが盛り上がった要素だと考える。

この素材で子どもたちがどう遊ぶかを見守ることから担任保育者Ｌがはじめたことで、子どもたちの発想を柔軟に受け入れる要素につながったのだと考える。

⑷　園全体の学び

図４は素材を生かすことや、素材から遊びが広がる要素を考えたものである。子どもの持っている力を生かす素材は遊びを盛り上げることができるのである。ただのダンボールだが、子どもにとっては遊びを広げる材料である。ダンボールを使ってそんなに難しい遊びをしなくても、楽しいは十分味わえることに気づけた。素材を十分生かせる子どもの育ちを支えるために　いつ、どんな状況のとき、どんな素材を子どもが要求してくるかを見極めることも必要である。見通しを持って

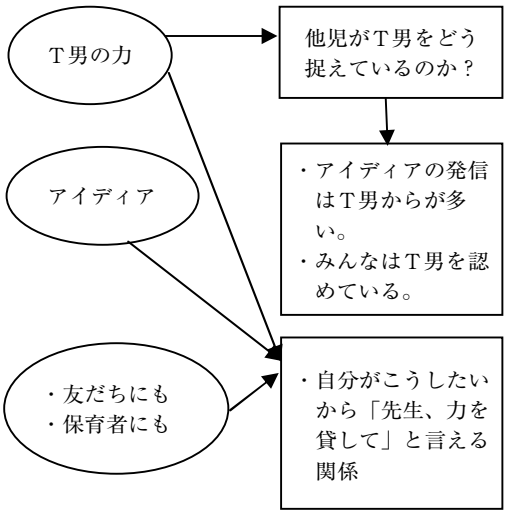

図３　援助者Ｈの気づきと学び

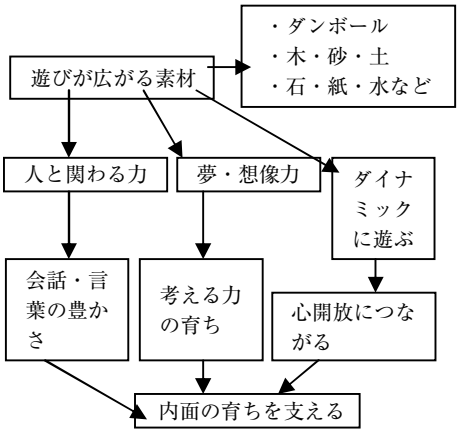

図４　素材の生かし方

遊べるように援助し、楽しい思いを持続できる材料の提供が5歳児の保育を盛り上げていく要素だと考える。

子どもが楽しさを味わう要素には、他児と分かりあえたり、工夫しあえたりできることが必要なのだと気づけた。子どもたちを焦らせないことが子どもを伸ばすことにつながる。そのためには、子どもからの発信を待つことや、内面の育ちをどう支えるかがキーポイントになるのだと考える。

⑸　園内研修における話し合いをもとにした保育者の育ちについての考察

4、5歳児グループは、担当している年齢が違うこと、一人でその年齢の保育を担当していることで、保育や話し合いを進めていく上での共感性が他のグループと異なる。4、5歳児グループでは、相手の保育者から出された場面の中での問題点に気づきにくい。お互いに、実践場面への理解がかなり受身的になるという問題が生じるということに気づいた。

0、1歳児に関しては、年齢は違っても同じフロアーの中で一緒に保育をしているし、3歳児においては、クラスは別だが、同じ年齢であるため、保育内容に関しての打ち合わせが綿密に行われていることや、生活場面において、同じ行動をとることが多く、4・5歳児のグループに比べて共通性が多い。

たとえば、当初、4歳児担当保育者Kの言動の中に、「そうなんだ」「しらなかった」「そうなるんだ」「そうすればいいんだ」など、自己の問題から離れた次元に対する応答が感じられた。しかし、話し合いを通して、仲間の存在が、次元のずれを少しずつ解消させた。保育者K自身のイメージで、問題解決できる状況をつくる姿勢が生まれたようだった。

一方、実践場面提供者Lは、自己の良い点をいくつか確認でき、保育への自信を得ることができたようだった。

話し合いの参加者は、保育者KとLの状況を読み取り、素材を生かすことに視点をあて話し合っていくことで、それぞれの発見をし、自己の学びとしている。小グループで話し合えたことを、全体の場において広めている。段階的に討議の場を大きくすることの意義が確認された。

Ⅳ　総合的考察

園内研修を通して得られた、保育者の「遊び」を見る目をまとめてみる。

1．遊びの意義の捉え方の共有

遊びは身体の諸機能・五感の発達を促し、知的能力を発達させる。それは、人や物・自然や社会についての知識、認識する力、想像する力を身につけ、言葉の発達などへと広がり、遊びを通して子どもたちは、生きる力を得ていることを、保育者はそれぞれの事例から、学べたことを実感したのである。

遊びを通して生活する多様な力が養われ、遊びは「おもしろい」や「楽しい」を子どもに味わわせてくれるものである。具体的には、ワクワク・ドキドキの体験は遊びの中にあり、遊ぶことによって、子どもの内面が育ち自主的・自発的な力が育つという考えを、討議を通して共有することができた。

子どもの遊んでいる姿の内にひそむものは、さまざまであるが、保育者は、多様な場面から、子どもの何が育っていくのかを確実に見届け次へのステップアップのための遊びの提供や発展のための援助の工夫が必要であることを、討議から学びあえた。

遊びを通して育っていくのは、子どもだが、そこに寄り添い、子どもたちが育っていく姿を見つめながら保育援助をする保育者自身が育っているという事実を事例検討や討議の中で確認することができた。

子どもと保育者は、互いに相互作用をもたらしながら遊びを楽しむことから多くを学んでいくことを保育者たちは、気づきあっている。
そこから、遊びは生きる力を培うのにつながり、遊びによって豊かに育めるという意義が浮きぼりにされた。

2．遊び場面に見られる子どもの内面の育ち

ここでは前述した「実践場面1・2」の事例からの学びを再度取り上げ、Mちゃんの「内面の育ち」をテーマにした討議の過程をまとめる。

０・１グループの話し合いにおいては、まずＭちゃんの現状を確認した。そこでは、Ｍちゃんに関するエピソードを取り出し、さまざまな角度から話し合いが行われた。複数担任であるメリットを上手に利用し、他の保育者のよいところを視覚的に捉えるのではなく、話し合いからその存在を認め自己の学びとしていった。

そこから導かれたＭちゃんの内面の動きは、図５のように示された。Ｍちゃんは、内面ではしっかり取り込んで、溢れ出る時期を待っていたのだと考察された。他児が楽しんでいる姿が、Ｍちゃんの内面発達へも影響を及ぼしたのだろう。

保育者による触れあい遊びを通して、五感が刺激され、安心感を育てたと考える。その際、保育者は、赤ちゃん体操などの文献を参考にしながら、身体の機能が高まる刺激の仕方を工夫する機会も設けた。

そのなかで、面白い・嬉しい・楽しい・笑顔など、心が育つと現れるよい表情や、不快な表情も現れてきた。表情は、内面の育ちに強く関係するのだろう。 子どもの内面を育てるには、その子の生育暦を保育者が汲み取り、接することが大事ではないかと考える。

また、内面育てには、そばにいる大人が楽しそうに何かをする姿を見せることも大切である。気持ちを言葉でうまく伝えられない乳児たちは、そばにいる保育者が気持ちを察し、代弁してあげることが必要である。自分の気持ちをきちんと代弁してもらえると、満足げにうなずく、ニッコリ笑顔が出て次の行動を始めることができる。また、逆にわかってもらえないと、子どもでも、モヤモヤした気持ちがわき内面の育ちにも影響があると考える。

０、１歳児グループは、３人の若い保育者が刺激をしあって成長をしている。グループでの話し合い体験の積み重ねが、保育者自身の話し合いに臨む姿の変化や問題にする内容の視点の変化につながっていた。話し合い後には相互理解が深まり、保育の連携や保育内容の工夫、役割分担や環境構成への努力にも見られるようになり、保育がスムーズに進められていけるようになっていく様子が読み取れた。

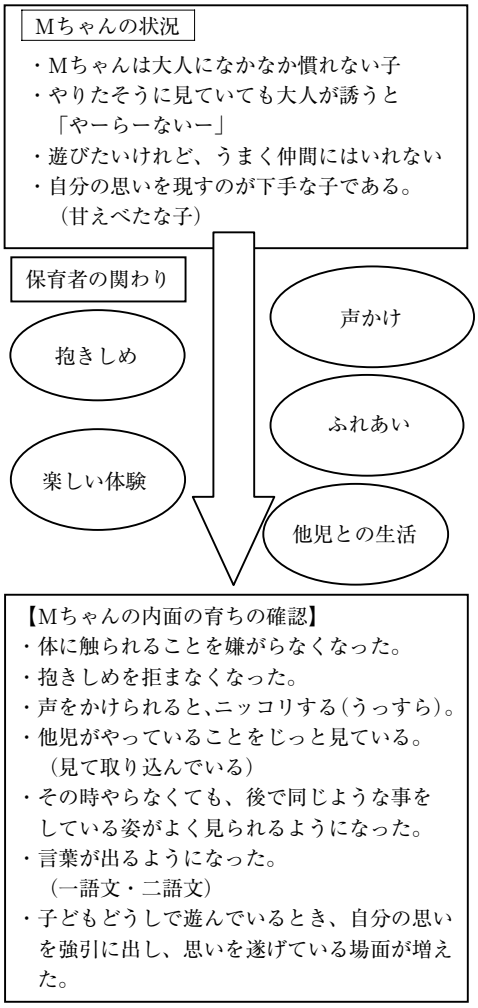

図５　　Ｍちゃんの内面の育ち

３．あそびを援助することへの意識の変容

⑴　保育者としての心がけ

子ども一人ひとりが、心から「楽しいな」「うれしいな」と思うように常に意識を持っていることが必要である。成長や個性に合わせて、新しい発見や感動、友だちと関わることが楽しめる遊びを提示していくことが望ましいと考える。

遊んでいる子どもの気持ちを受け止め、その子の目線に立って考えることを心がけたり、子どもの遊びの邪魔をしないで、気持ちに寄り添ってあげたりしていくことも大事であると考える。

年齢や発達に応じた環境づくりや援助、言葉がけを工夫し、保育者自身も子どもたちと一緒に楽

しい・おもしろい・ドキドキを共感し合っていけるよう心がけてくことも大事だと考える。

保育者との信頼関係ができるよう、やさしく言葉をかける、スキンシップをとる、一つ一つのことを充分認めたり、共感したりするように心がけ、保育者が子どもの好きな遊びを一緒にすることで、安心感を持ち、より楽しめるようになると考える。保育者は子どもの発信に耳を傾け、子どもに寄り添い、また仲間として遊びに加わり遊びを盛り上げ、子どもと一緒に楽しみ喜びを共感できるように心がけていくとよいと考える。

⑵　遊びを進める上での問題と課題

遊びを楽しんでいる子だけに注目するのでなく、遊びに入って来ない子、楽しめない子への対応をすることが大切だと考える。子どもの育ちによって興味・関心・理解度などに差がある。どこに基準を置き保育したらよいかを十分吟味する必要がある。遊びを見守るとき、保育者の言葉かけが多くなってしまい、子どもの持っている力を十分に出せない状況を作らない努力をするのも時には必要であると考える。トララブルの場面での保育者の介入の仕方･言葉かけの仕方は課題である。一斉形態の遊びだと参加できるが、自由形態にするとなかなか興味を示さない子への遊びの誘い方にも課題がある。子ども一人ひとりに合った言葉かけ（どう言葉をかけたら、より楽しい思いが経験できるのか）を工夫することも課題である。子どもと同じ目線で付き合うことのむつかしさ、ともすると保育者が引っぱっていないかという思いのなかで、子どもも保育者も「楽しい」と感じられる遊びの展開は常に保育者の課題となる。

最近の保育では、導入・展開・整理の流れを設定することは少なくなっている。このことが、子どもの気持ちを高め、楽しめる内容の工夫、今日の保育で育ったものを保育者が自己の保育を整理しにくくなっている原因の１つだと考える。保育には、どこでどんなかたちにせよこの確認は必要であり、自己の保育に対しての整理の仕方や確認の方法が課題となる。

遊び方を知らない子が目立つ現状をかかえ、どの子がどんなことをわからないのか？子どもの立場になって考えてあげ、わからない子には、じっくり寄り添って対応することが必要であるが、遊びを提供する側の保育者自身が遊びを楽しめていないのではないかという問題も最近では珍しくない。

Ⅴ　園内研修における現状と今後の課題

１．保育者の取り組みの現状

本研究における「場面採り」への保育者の意識については、保育者の年齢が多いほど「気楽さ」があるようだった。保育経験が、採取に対する緊張感を取り除いているのだと推察する。一方、場面内容採取の豊かさは、保育経験や年齢からは感じ取れず、保育者自身の生活の豊かさとの関係が深いと考えられる。

話し合い場面での活発度については、保育経験が増すほど話し合い場面での気づきもよく、自分の考えが整理できる。保育経験の豊かさ、保育内容・知識の豊かさ、研修体験の積み重ね、話し合い体験の豊かさ、学びの積み重ね、保育中の視野の広さなどの要素が活発度に結びついているのだと考える。

学び体験の保育へのとり込みについては、保育経験の少ない保育者は、園内研修での学びが新鮮である。この研修での学びが、現在保育している子どもたちに直接結びついているので、内容が分りやすいというのが原因であると考える。また、思考も柔軟で、受け入れやすく、とり込み結果を、先輩や同じフロアーの保育者に相談しやすいことも認められる。しかし一方で30歳代の保育者は、保育経験が10年を越え、自己の保育の面白さを発見すると同時に、出産や子育ての時代に突入するため、とり込み意欲の衰退も感じられた。

２．課題

今回行った園内研修において、各保育者の質の向上につながる学びが充分にあったと感じられる。具体的には、以下のような成果と課題が認められた。

・保育者の経験年数・保育への姿勢・持っている課題意識に差があるが、同じ場で研修することにより刺激となり、保育者としてのお互いの存在への意識を高めた。
・場面の記録の仕方・場面への思い、説明の仕方などは様々であったが、このことがお互いの良

い点を取り込める機会となり、個々の育ちへ変化を与えていく学びの提供の場になった。事例場面の記入の仕方・話し合い方の工夫など、この研修の中で学べた結果が今後どう現れて来るか楽しみでさえある。

・各年齢グループでの事例場面の検討は、事例に要求されている内容の把握につながり充実したものとなった。少人数で参加者が自己を発揮したり、高めたりできる場となったと思われる。年齢グループでの話し合いを基に資料が作成できたことは、全体研修の場面で学びの視点を見つけるのにとても役立った。事例場面を継続的に集め、今後も年齢グループで検討を重ねて行きたい。

・今後は、各保育者が１実践の記録を提出し、グループワークを繰り返し報告し合うような検討の仕方を変化させて実りあるものにしていきたい。同時に保育者自身が自己の学びを整理していく方策を検討したい。

Ⅵ　おわりに

本研究は、Ｆ保育園の園内研修からの学びを中心に子どもに「遊び」を提供する保育者の学びや育ちを検証したものである。保育現場はとにかく「忙しい」、「目まぐるしい」。けれども楽しい。癒される場なのである。それは、子どもたちがいて、日々を楽しませてくれるからだと実感している。

子どもはパワフルで、元気である。しかも、生き生きと自己を表し成長し続けているのである。保育者は、その元気な子どもたちと、日々寄り添って暮らす一番身近な存在である。子どもに負けぬエネルギーを貯え、子どものお手本になって、生きる素晴らしさを伝えるものでありたい。そのために、自分磨きをしたい。自分のまわりに存在する、素敵な人々との出会いを土台にして、子どもに負けない笑顔が、心から出せる人でありたい。こんな思いを、現場で働く保育者たちは、常に実行している。保育者とはなんて素晴らしい人々だろうと感じる次第である。

【参考文献】

保育所保育指針（1999）日本保育協会

神田英雄：(2005) 0 歳から 3 歳．全国保育団体連絡会

神田英雄：(2004)3 歳から 6 歳．全国保育団体連絡会

神田英雄：(2004) 伝わる心がめばえるころ．かもがわ出版

佐伯胖：(2001) 幼児教育へのいざない．東京大学出版会

佐伯胖：(2007) 共感．ミネルヴァ書房

秋葉英則・白石恵理子．シリーズこどもと保育（2001）0 歳児・1 歳児・2 歳児・3 歳児 4 歳児・5 歳児：かもがわ出版

西洋子・本山益子・鈴木裕子・吉川京子：子ども・からだ・表現．（2003）市村出版

河邉貴子：(2005)遊びを中心とした保育．萌文書林

小川博久：(2001)「遊び」の探求．生活ジャーナル

津守真：(1987)子どもの世界をどうみるか．ＮＨＫブックス

加藤繁美：(2002)子どもと歩けばおもしろい．小学館

加藤繁美：(1999)しあわせのものさし．ひとなる書房

西川由起子：(2003)子どもの思いにこころをよせて．かもがわ出版

頭金多絵：(2002)「気持ちいい」保育、見～つけた！．ひとなる書房

丸山美和子：(2003) 子どもの発達と子育て支援．かもがわ出版

飯田和也：(2005)一人ひとりを認める保育．北大路書房

Growing Awareness and Insight towards "Play" among Nursery Teachers

―A Case Study of Teachers' Conferences in Nursery School―

Hirano, Hitomi*
Suzuki, Yuko*

保育所保育指針第13章「保育所における子育て支援及び職員の研修」などの項目には、保育所に求められる質の高い保育を支える内容として、「職員の日常の自己学習や保育活動での経験および研修を通じて深められる知識、技術並びに人間性が実践に反映されることにより確保できるものである」と記されている。このことを受けて保育の現場では、忙しい保育時間のなかから研修時間を生み出し保育者の資質向上に努めている。

本研究は、保育の実践現場において、実際に保育者が学びあった研修の内容をもとに、遊び場面の検討からの保育者の気づきと子どもの遊びを見る目の育ちを検証したものである。園内研修を通しての保育者の育ちあいや気づきの内容を整理し、保育者同士が資質を高めあう姿を追った。今後の実践への糧となりうる学びを確認しながら、園内研修における今後の課題を探った。

キーワード：園内研修，遊び，保育者の資質向上，子どもを見る目，保育所保育指針

**Nagoya Ryujo (St. Mary's) College*